

教員・学生による推薦図書

※推薦図書は図書館で貸出できます。

教員〈高松〉

心の休ませ方

▶ 加藤 諦三 (PHP 研究所)

今あなたは生きることに疲れてませんか?それは誰にでもあることで、生きるためのエネルギーが少し不足しているのです。そのまま頑張っても消耗するだけですますます疲れてしまうかもしれません。本書を読んでなるほどと共感した人は、少し休みが必要かもしれませんね。

機械工学科教員 吉永 慎一

「本当のこと」を伝えない日本の新聞

▶ マーティン・ファクラー (双葉社)

東日本大震災、福島原発水素爆発、炉心熔融などの取材を通して、日本の記者クラブが抱える問題点を提示している。当初、SPEEDI (緊急時迅速放射能影響予測) ネットワークシステムの情報が開示されなかったが、メディアの深い追求は見られない。ジャーナリズムの精神を欠き、プレスリリースのみを報じるメディアも、いよいよ変遷の必要性が感じられる。しかし結局は、自ら作り上げたものでない日本の未熟な民主主義がもたらす国家の構造的問題であることを認識させられる。

電気情報工学科教員 原圃 正博

本当は謎がない「古代史」

▶ 八幡 和郎 (ソフトバンク)

日本の古代史は「謎」に満ちており様々な説が乱立していますが、それに対して「謎は無い!」と言い切った本です。通産官僚出身の異色の大学教授が従来とは異なった日本の古代史観を提供してくれます。日本の古代史に興味がある方は是非どうぞ。

機械電子工学科教員 相馬 岳

ポジティブ病の国、アメリカ

▶ バーバラ・エーレンライク著、中島 由華翻訳 (河出書房新社)

アメリカ合衆国では、とにかく前向きでエネルギッシュな人間でないと、社会で認められない、ビジネスで成功しない、アメリカンドリームが見られない、という強迫観念が存在するらしい。のんびりとした生活を選ぶか、極端に忙しい生活を選ぶかは個人の自由だが、病的な強迫観念と一緒に生活するのは私には無理だ、と考えさせられた一冊。

機械電子工学科教員 由良 諭

首斬り朝 (愛蔵版) キングシリーズ

▶ 原作:小池 一夫、作画:小島 剛夕 (小池書院)

公儀お様(ため)し役山田朝右衛門(あさえもん)は、首斬り人として罪人の生と死を常に見つめてきた。首斬り人として、罪人の人としての背景まで覗くのは過分なことだが、主人公は罪人の背景を知ったうえで首を斬る。原作もスゴイが、作画もスゴイ。小島剛夕のあとに小島剛夕なしと思わせるシリーズである。愛蔵版が出たので、購入するなら、全巻ほしい!

機械電子工学科教員 由良 諭

水と人類の1万年史

▶ ブライアン・フェイガン著、東郷 えりか翻訳 (河出書房新社)

本書は何千年にもわたる人と水の変わりゆく関係について語る。古代文明から現代まで、世界各地で人類はいかに水を手に入れて日々利用し、干ばつや洪水に立ち向かってきたか。著者は考古学や気候学を駆使して、生存に欠かせない水と文明の繁栄と滅亡を賭けた人間の長い闘いを描く。

建設環境工学科教員 松原 三郎

学生〈高松〉

十五少年漂流記

▶ ジュール・ヴェルヌ (集英社)

この本は、ニュージーランドのある学校の生徒15人が、夏休みを利用して6週間の沿岸航海をするつもりだったが、その前夜、少年たちはいち早く船に乗りこんだものの、ふとしたことから漂流を始めることになり、その中で数多くの困難に立ち向かっていく、という話です。

孤島のある島に着いた8~14歳までの15人の少年たちが、限られた知識の中で成長していく物語であり、ページ数が529ページと少々多めですが、自分が物語の中に引き込まれていきます。

仲間割れもありますが、命を助けられることによって芽生える友情も見所です。

1年1組 植田 大貴

妖怪アパートの幽雅な日常

▶ 香月 日輪 (講談社)

私がおすすめる本は、「妖怪アパートの幽雅な日常」です。

この本は、主人公・稲葉夕士が高校の入学と同時に下宿を始める物語です。しかしその下宿先は、妖怪が暮らしていたのです。その中で、常識や普通、人間関係と進路について悩む主人公を描いたものです。

読みやすいし、同世代が主人公なので話に入り込めます。軽い気持ちで読んでみてはどうでしょうか。

1年3組 松下 祐子



匣の中の失楽

▶ 竹本 健治 (講談社)

ミステリーサークルに所属しているメンバーのうち一人が殺される。そのサークル内で書き進められている推理小説の内容が現実で起きる事件とかさなりあい、徐々に小説が現実を侵食していく。

著者は竹本健治氏で、この作品がデビュー作です。この小説は物語の中で小説を書いているので、仮想と現実が入り交じって書かれています。そのため、読む方はどちらの話が現実で、どちらの話が仮想であるかを見極めない限り真相が分かりません。読み進める内にどんどんわけが分からなくなること受けあいなので、推理小説が得意な方、ちょっと変わった本が読んでみたい方は是非読んでみてください。

機械工学科 4年 片山 響

6-シックスー

▶ 早見 和真 (毎日新聞社)

これは、東京6大学野球 (早稲田・慶応義塾・明治・法政・東京・立教が加盟) を題材にした連作風小説です。ヒーローだけが主人公ではなく、また本書6篇全てが野球選手を主人公にしている訳ではないのに、それでもストーリーになるというのが、おそらく高校野球、プロ野球とは違った大学野球の魅力なのではないかと思わされる作品です。

建設環境工学科 4年 吉崎 晋理



教員〈読間〉

プログラミングの基礎

▶ 浅井 健一 (サイエンス社・理工学社)

世の中にプログラミングの入門書なんていくらでもあるのに、なぜこの本を推薦するのか不思議に思われる方も多いでしょう。実際、この本は入門書の体裁を取っていますが、バグを出さないための考え方やある程度の大きさを持ったプログラムを作る事を目標に練られた練習問題など、プログラミングの経験のある方にも読み応えのある内容になっています。

そして何より、OCamlと呼ばれるCやJavaとは毛並みの違う言語を使用しているのもこの本の魅力の1つです。読む人を威圧するような厚い本でもないの、プログラミングの苦手な方も得意な方も、興味があれば是非手にとってみて下さい。

電気情報工学科 4年 水野 雅之

謹訳 源氏物語 一〜十 (現在八まで刊行中)

▶ 林 望 (祥伝社)

源氏の現代語訳は、与謝野晶子・谷崎潤一郎・瀬戸内寂聴等、多くの作家が手掛けてきたが、それらと本書との違いは、断然その読みやすさにある。現代語訳的な不自然な調子が全くなく、現代小説としてスラスラ読め、いつしか物語内に引き込まれてしまう。やはり源氏はおもしろいのだ! 本の装丁の奥ゆかしさにも注目しつつ、ぜひ源氏物語読破を!

一般教育科 (国語) 教員 東城 敏毅

狂気の山脈

▶ ハワード・フィリップス・ラヴクラフト (PHP 研究所)

この本は、最近若干ですが知名度が上がってきている「クトゥルフ神話」に収録されている物語の1つです。「クトゥルフ神話」とは、一応は神話という体系をとっていますが、その実は宇宙的な恐怖と邪神達による抗いようのない絶望を基本としたコズミックホラーです。

さて、この本ですが、邪神が出てくることはありませんが、人間の常識を超えたものとの遭遇によって沸き上がる恐怖、自分達の信じていたものが根本から破壊されることにより生じる狂気といった部分は、しっかりと「クトゥルフ神話」となっています。

「神話」といっても堅苦しいものではないので、是非読んでみてください。

制御情報工学科 4年 齋藤 英彰

岩波数学辞典 [第4版]

▶ 日本数学会編 (岩波書店)

数学の全分野が23部門に整理され、515項目中に数学用語の正確な定義と定理・予想などが簡潔に記述されている辞典です。数学ファンの中にはこの辞典の読破を試みている人が少なからずいます。皆さんも挑戦してみたいか? 学校で習った項目、数学史の項目、各部門の最初の項目から読み進めると良いと思います。

通信ネットワーク工学科教員 糸川 一也

もしも、うちのワンちゃんが話せたら・・・

▶ 西川 文二 (成美堂出版)

犬の躰は大変ですよ。どんなに理屈を言い聞かせても、それは人間の都合。彼らに言葉は通じません。人間には人間の心理学があるように、犬には犬の心理学があります。「叱るときに名前を呼んではダメ」、「初対面の犬に目を見ながら近づいてはダメ」、「人の名前はきちんと呼びなさい」、「人の目を見て話さない」と言われてきたのに・・・? そう、これは人の都合。犬の心理学・脳科学で説明すると実に簡単です。

電子システム工学科教員 藤井 宏行



教員・学生による推薦図書

※推薦図書は図書館で貸出できます。

静かな生活

▶ 大江 健三郎 (講談社)

言わずと知れたノーベル賞作家による“お薦めできる小説”。タイトルの通り、心穏やかになれる作品です。これを読んで「ふーん大江もこんなもんか」と思ったなら彼の若い頃の作品に“お薦めしにくい小説”が沢山あって実はそちらの方が…。

情報工学科教員 奥山 真吾

沈黙のフライバイ

▶ 野尻 抱介 (早川書房)

表題作「沈黙のフライバイ」は、JAXAの野田篤司さんが提案する恒星間探査のアイデア「鮭の卵計画」を基にしたハードSF小説です。非常に読みやすい短編集なので、SFが苦手な方も是非一度読んでみてください。どの話も今世紀中に実現可能では？と思わせる話ばかりです。※鮭の卵計画は、野田氏のHP上で公開されています。

情報工学科教員 鈴木 浩司

空飛ぶタイヤ

▶ 池井戸 潤 (実業之日本社)

『後悔はしていない。ただほんの僅か、失望しているだけだ。』(本文より)

すべての始まりは、ある中小運送会社の起こした母子死傷事故であった。世間の注目を集めた事故により、長年取引のあった取引先や銀行でも簡単に見放され、さらに事故の原因は「運送会社の整備不良」と断定されてしまった。この結果に納得できなかった運送会社の社長、赤松はトレーラーに欠陥があるのではと考え、自動車会社の調査結果を疑い始める。

一方、一部の自動車会社の社員やある雑誌記者も事の真相に気づき始めていた。そんな中、自動車会社とその関係企業間で利権争いが発生して、当初運送会社に吹いていた逆風は徐々にその風向きを変え始めた。

『下町ロケット』の著者の代表作であり、第136回直木賞候補作品。世間の無情さと暖かさが同時に感じられる作品です。

通信ネットワーク工学科3年 近藤 圭典



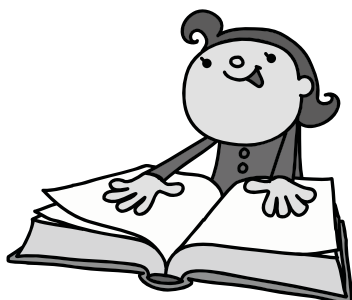
学生〈読間〉

いじめの構造：なぜ人が怪物になるのか

▶ 内藤 朝雄 (講談社)

最近いじめによる自殺がニュースとして報道され、一つの大きな話題となっている。思えば昔からこれらあり、長い間続いてきているといえる。ではなぜこのような現象が起ってしまうかの解答がこれなのではないかとこの本を手にとってみたのだ。この本に書かれているいじめには様々な側面、社会にとっていじめの役割が描かれていたのである。これらから社会システムそのもの、あるいは人間そのものの性質がいじめを生み育ててきたことが理解できたのである。いじめと関わりあいがなかった人も、この機会にぜひこの書を手にとってみて、いじめというものの本質と向きあってみてはいかがだろうか。

情報通信工学科4年 吉塚 永輝



ぼくが地球で会った愉快な人たち

▶ ピーター・フランクル (講談社)

私がこの本を読んだ感想は、思ったより難しい本ではなく、むしろ楽しい本だったということでした。世界中の国々へ旅行に行く、というのはよくある話なのですが、この人は「不真面目な旅行」をしているので、読んでいて飽きませんでした。

この本に書かれている中でも一番危なかったのは、著者であるピーター・フランクルが、とある女性と会うために国境を越える、という話なのですが、彼は入国の際にくつ下にドル札を入れていました。その国では物価が安く、当時貧乏学生であった彼はその国でついでにショッピングをしようと思っていたのです。しかしその国境での検査を受け、危うくドル札の持ちこみがバレそうになるのですが…。そこを、彼らしい方法でどうにか突破することができたのです。

他にも、ビザの発行が遅れたり、車のトランクに山盛りに買ったブランドを全て盗まれたり、とにかくドタバタの世界旅行が書かれていました。

また、彼は泊まった国に対して、とても客観的に評価しています。自分の足で、目で、耳でその国々に対しての感情や印象が書かれていました。国の考え方、風習についてもふれられていて、とても参考になるところもあります。

たくさんの国々をまわっているピーター・フランクルですが、これらの旅行の始まりはなんと「兵役が嫌」だと逃げたドイツが始まりでした。そこからの旅行もとても変わっていて、その先々で会う人々もとても特徴的でした。

数学の学者であり、大道芸人であるピーター・フランクルのドタバタ世界旅行、ぜひお楽しみください。

情報工学科2年 寺島 祐